

ゲスト：毛糸・編み物を通じて被災地住民と繋がる 梅村マルティナさん

聞き手：京都市職労委員長 NPO「ねっとわーく京都 21」 理事長 小林竜雄

**小林** 3月11日に京都市役所前で、「3・11を忘れないために」と書かれたプラカードを自転車に付けた外国人女性が編み物をされていたという話を聞き、とっさにその風景が頭に浮かびました。どんな人なのかと思ってインターネットで検索してみると、ドイツで医師免許を取得され、研究者として来日し、京都大学で研究活動に携わっておられたことがわかりました。その後結婚・出産を経て、現在は大学でドイツ語の講師を務めるかたわらで編み物教室の先生もされておられるそうですね。実に面白いというか、私のところにも「この人はただ者ではない」という雰囲気が漂ってきました。そこで急遽、今回、お話を伺ってみることにしました。よろしくお願ひします。3月11日に市役所前というのは、前もって予定されていた行動ですか。

**M・梅村** 予定を組んでいたわけではありません。市役所前は初めてです。本当は気仙沼へ行くべきだったのかも知れませんが、3月11日という日に被災地へ身を置くことは、気持ち的に難しいのです。私は被災していませんしね。もっと大切なことは被災していないところで、「3・11を忘れてはいけないよ」というメッセージを発信することではないかと思っていました。そういう私の思いに一人でも気づいてくれれば十分だと考えて、自転車にポスターを付けて、朝8時から市役所前に座って編み物をしました。

**小林** 何人かの方から声を掛けられたそうですね。

**M・梅村** 「よろしくお願ひします」とか、「寄付できますか」、「いま編んでいるものを買うことはできますか」などと声を掛けてくださいました。「私は編んでいるだけ、3・11を忘れないでほしいだけです」と答えました。仲間にも声を掛けていましたから、11時くらいには5人くらい、あとは何人か入れ替わりで一緒に編み物をしていました。夕方5時頃にはちょっとゲリラ的ですが、ミニライブもしましたよ。

**小林** 私は労組の役員ですからデモをしたり、集会を開いたりという訴え方はしますが、座って編み物をしてアピールされているのには、本当にびっくりしました。

**M・梅村** 今回は小さい輪でしたが、できれば来年はもう少し広く声を掛けて、市役所前広場の内側で規模を大きくできればいいなと考えています。

**小林** 梅村さんはいま気仙沼に会社をつくり、被災者の自立に向けた支援をされているそうですが、元々、東日本大震災の被災者支援をしようと思ったきっかけはどのようなところにあったのでしょうか。

**M・梅村** 3年前、ちょうどドイツから帰ってきて、テレビで東日本大震災のことを知りました。ドイツの親戚なども福島原発事故を受けて、放射能汚染をとっても心配していました。「子ども2人を連れて早くドイツへ帰ってこい」と強く言われました。大人はともかく、「安全が確認されるまで子どもたちはドイツへ帰すように」と、友人が航空券まで手配してくれていました。

**小林** 確かにそういったことでは、ずいぶん悩まれたと思います。

**M・梅村** ですが、長男もドイツに帰るのを嫌がりました。「友達も一緒に帰るならともかく、自分たちだけというのは納得がいかない」というわけです。子どもたちは将来もずっと日本にいたい、暮らしたいのです。「裏切り者にはなりたくない」といった感じでした。考えた末に子どもの言い分も分かる気がして、日本に残ることに決めたのです。私ももちろん日本が大好きです。そう決めたら何かしないと、もうじっとしてられないのです。何よりも「早く東北を元気にしないといけない」と思いました。私はいままで靴下を編んだ収益などで、アフガニスタン問題を支援してきました。すぐさまアフガン支援をいったん中止して、東北震災支援に切り替えたのです。私には何ができるのか、どういう支援ができるのか、私が被災者であればどのような支援がうれしいのか、ずいぶんと考えました。そして「何か手を使って集中すれば、嫌な思いも少しは忘れられるのではないか」と考えたのです。自分でつくったものであれば、人を繋ぐこともできるだろうと思いました。

### **被災地へ送った毛糸がきっかけで**

**小林** それが毛糸ですね。

**M・梅村** そうです。

**小林** それはいつくらいの時期ですか。

**M・梅村** 父の誕生日ですからよく覚えていますが、4月18日です。当時、震災後すぐにレンタカーで毎週現地に行って、被災地住民の欲しいものを調査して支援者と繋いでいる京都のNPOがありましたから、そこに毛糸を預けたのです。

**小林** NPO団体も、毛糸と聞いて驚かれたのではありませんか。

**M・梅村** 「えっ、なんで毛糸？」という感じでした（笑）。水も足りない時期でしたからね。でも毛糸ですと、例えば「腹巻帽子」と私は名付けていますが、これは腹巻きにも帽子にもなる、さらに襟巻きにも膝掛けや座布団にもなるという万能のすぐれものなのです。4月と言えば被災地はまだまだ寒いのです。とにかく最初は毛糸を100セット持って行っていただきました。

**小林** 反応はどうでしたか。

**M・梅村** ゴールデンウイーク前に現地の方から電話があり、「もっと欲しい」ということでした。うれしくて、あわてて小包をつくって気仙沼の避難所に送りました。

**小林** 私も震災後、ゴールデンウイークのときに、気仙沼から陸前高田のほうへ足を運んでみました。当時、まだ気仙沼市内も至る所で船が陸地に残っていましたし、海岸線沿いの集落は被災した状況そのままの姿でした。現地がそういった状況のときに毛糸が届いた、そして「送ってほしい」との被災住民の方の声も梅村さんへ届いた、これはうれしいでしょう。

**M・梅村** 本当は毛糸を送るだけではなく、現地に自分自身が行って編み方をお教えするべきだと思っていました。数週間後に現地から届いた写真をみると、送った毛糸は立派なニット作品に仕上がっていました。私が現地に行かなくてもこれだけやってくれていると知って、本当にうれしかったですね。

**小林** でもその後、6月に、現地に行かれていますね。

**M・梅村** 編み物を教える為にはなくて、もうただみんなに会いたくて、会いたくて…。一緒に編み物をしているいろいろと話を聞いて、周囲も見てみたくて…。行く前に私が一番心配したのは、被災地と被災された人を目の前にして、もう涙が止まらないのではないかと、何もできないのではないかということでした。でも涙はでませんでした。なぜ涙がでないのかはうまく説明できません。ショックが大きいからかなとも思いましたが、雰囲気的には現地の人は強いのです。前向きなのです。泣いていたら前に進めない、そういう決意が私にも伝わってきたのです。

### 話題を呼んだタコちゃんメッセージ

**小林** まず水、ミルク、レトルト食品など、緊急性の高い物を送るとするのはすぐに頭に浮かびますが、毛糸を送るという発想はなかなか出てきません。あとで保育士さんがおっしゃっていましたが、おもちゃ、トランプなどのゲームもそうですね。避難所のなかで何もすることがない、人間関係も閉ざされたなかではストレスも溜まっていきます。そこに何か集中できるものがあるだけで状況はずいぶん違ってくるといった話をされていました。最初に気仙沼に行かれ、編み物を通して梅村さんが受けた印象はどのようなものでしたか。

**M・梅村** 避難所にいらっしゃった180人のうち、実際に編み物をしたのは20人くらいです。新しく教えるのではなくて、ある程度は編み物ができる方がほとんどです。直後ですから、新しいことに挑戦する元気はなかったのかなと感じていました。一から編み物を勉強するのではなくて、もっとみんなが気軽にできることはないかなと思って考えたのが「タコちゃん」です。

**小林** 「タコちゃん」を少し説明してくださいませんか。

**M・梅村** 気仙沼市の小原木中学校避難所から生まれたから「小原木タコちゃん」です。タコには足が8本、もし失っても足は生えてきますし、幸せもつかまえることができるのです。漁港気仙沼の復興シンボルなのです。タコちゃんづくりは避難所の主婦のみなさんから子ども、男性にまで巻き込んで、大きな笑顔の輪を広げていったのです。

**小林** 「タコちゃん」は梅村さんのデザインですか。

**M・梅村** そうです。作り方はとても簡単ですよ。

**小林** つくる人を増やして、いまは手づくり市などでも販売しているそうですね。

**M・梅村** はい、手書きのメッセージが入るようになっていきます。いまはネットでも販売しています。

**小林** 1人1人メッセージを書いているのですか。

**M・梅村** 最初はそうでしたが、ちょっと大変で「がんばりましょう」などになってしまうので、いまは女性が1人専属で担当してくれています。彼女は最初からのメッセージをすべてまとめて本を出しています。タコちゃんのメッセージも最初は暗かったのですが、徐々に明るくなってきて…。

**小林** それはうれしいですね。そういった活動を通じて、震災から1年後に気仙沼で会社を設立されたということですか。

**M・梅村** 避難所に行っているときは、みんなタコちゃんづくりに関わっていました。やがて仮

設に移っていくと、集まるのも難しくなっていきます。お父さんたちは船に戻っていきますし、子どもは学校が始まっていきますから、残ったのは比較的高齢の女性の方たちでした。私は「ここに必要なのはちゃんとした仕事だな」といつも思っていました。京都の知恩寺さんの手づくり市で靴下などの販売をしていましたから、これを被災地へ持っていけば、少しは仕事も生まれるのではないかと考えたのです。

### **母親が仕事ができる会社になりたい**

**小林** 最初は避難所に毛糸を送って、安らぎとかメンタルケアのような取り組み、次は少し広げて被災された方にお小遣いを稼いでもらう、そして最後は充実した生活を気仙沼でつくっていかうとする。物事の流れが順序よく発展してきていますね。

**M・梅村** リスクもお互いで少しずつ分担し、気仙沼の人たちの負担にならないように様子を注意深くみながら、1歩ずつ進んできたつもりです。

**小林** 会社の名前が「梅村マルティナ気仙沼F Sアトリエ株式会社」、会社は何人でスタートしたのですか。

**M・梅村** 最初は3人でした。現在は8人です。会社の目的はもちろんお金を稼ぐことでみなさんの生活ができること、もう1つは母親が仕事ができるような会社にしたかったのです。

**小林** それは子育てしながら働けるということ？

**M・梅村** はい。子どもが突然病気になったとしても問題なく休める、そういう会社になりたいと思ったのです。私も同じ道を歩んできましたから、母親の気持ちがよく分かるのです。

**小林** 研究者を退職されたときに感じられたことでもあるのでしょうか。

**M・梅村** 研究は母親になる前に辞めたのです。もう無理だと分かっていたから。母親として、子どもが病気のと看は一緒にいたいのです。いくら制度ができて、やはり一緒にいたいのです。だから休まないといけない。そういう気持ちに答える会社が必要かなと思いました。

**小林** 日本の会社はなかなか休めませんからね。

**M・梅村** みんなにそう言ったら、みなさんきょとんとしていましたよ。でも、いまは結構うまくいっています。4月から高校新卒の人も入社しました。この子には新しい仕事をどんどん覚えてもらい、新しいチャンスをつかんでもらいたいと思っています。小さい会社ですが、貿易のすべてを覚えてほしいし、コンピュータもそうです。いま会社ではお互いにドイツ語で少しだけ挨拶をしたりしていますが、これからは英語なども自然に使えるようになってほしいなと思っています。

**小林** 新しい若い方も含め、梅村さんの会社で働いて結婚し、子どもができて、子どもが病気なら休んで一緒にそばにいてあげられる。そういう会社をつくっていききたいという梅村さんの思いが伝わってきます。

**M・梅村** いまも働く時間は10時から3時までです。なぜそういうことができるかと言えば、会社はいまニットウェアをつくっているのですが、機械を使いますからその仕事は会社内しかできません。しかし、1つの製品として完成させるためには、機械以外の手仕事も結構あるの

です。それを持って帰って家でも仕事ができるのです。

### **被災者は同情ではなく、作った物を認めてほしいのです**

**小林** ですが、社長として経理から輸入全般までみないといけないわけですから、大変でしょう。

**M・梅村** 大変と言えば大変ですが、楽しいですよ。

**小林** 楽しさはどこに見つけているのでしょうか。

**M・梅村** 人間関係ですね、仲間意識がありますし、みんなが生き甲斐を見つけてくれたというか前向きになってくれているのが、うれしいのです。

**小林** 被災された方も仕事があるということが支えになりますからね。少し古いデータですが、気仙沼市もまだまだ仮設住宅にお住まいの方が市人口の1割以上だということですから、復興と言ってもまだまだ先の長い話だと思います。

**M・梅村** 周囲の方はみんな仮設住まいです。まず狭いのです。そして夏は暑い、冬は寒い。暖房をかけても断熱材が入ってないのか効いてないのか結露がすごい。仮設自体も2年という前提で造られたので、あちこちいま傷んできています。関連して感じたことをお話しますが、先日、京都の市役所前で編み物をしていたときに「寄付はできますか？」と聞かれました。ですが、いま現地の人たちは「寄付は要らない」と言います。3年経っていますから、ある程度必要なものは揃っています。そういう人たちがこれからしたいことは、自分の力でものを作っていききたいということです。被災者だからではなく、作った物をみて貰いたい。そして「この素晴らしい物が欲しい」という気持ちで買って欲しいのです。同情ではなく、人間として作った物を認めて欲しいのです。そこにもう1つ、いままで支援をいただいたことへのお礼の気持ちがこもっているのです。

### **ドイツ式編み物は肩が凝りません**

**小林** お会いする前に少し予備知識をと思って探っていたら、梅村先生が学生さんに「編み物をしながら勉強すると集中力が高まる」と話されているのを知りました、これって本当ですか？

**M・梅村** 本当です。私の授業では編み物をしながらドイツ語の勉強をしてもいいのです。いま大学のお昼休みに一部屋借りて、だれでも来ていい開放された編み物教室も開いています。編み物は動き自体が単純ですし、落ち着きますよ。落ち着くと集中力が高まるのです。私も医学部で多くの言葉を暗記しないとイケないときに、編み物をしながら勉強していました。編み物作業の進み具合と記憶が結びついていくのです。毛糸の色とも結びついて記憶に残るのです。言葉を覚える時に編み物はいいですよ。

**小林** 「ながら学習は良くない」と言われませんでしたか？

**M・梅村** いいえ、私が大学生のときには編み物をよくやっていましたよ。別に珍しくないです。編み物をしながら講義を聞いているのです。交替して1人がメモをとり、それを後からみんなに回すのです。本当に集中できますよ。

**小林** 身体と記憶が合わさっていくわけですね、何となく分かる気がします。いちどやってみる

必要がありそうです。ところでいまお手元にある「腹巻帽子」は梅村さんが考案されたのですか。

**M・梅村** 実は「腹巻帽子」は失敗作なのです（笑）。本当は帽子をつくりたかったのです。帽子を編んでいたのですが、途中で閉じるところを忘れてしまったのです。困ったなど考えているうちに「腹巻帽子」という方向へアイデアが浮かんできたのです。

**小林** 復興もまだまだ道半ば状態ですが、被災された方々も自分で仕事を確保して生活をつくっていくことがいちばんの願いだと思います。そういう意味では梅村さんのユニークな会社ももっともっと大きく伸びて欲しいと思います。当面、梅村さんはどういったことをしたいと考えておられるのでしょうか。

**M・梅村** これからの1年間で区切りますと、スタッフは全員女性ですが、自分達でスペースを見つけて店舗を持ってほしいなと思っています。まずこれですね。ビジネスを大きくすることは最重要ではありません。今はインターネット販売が主力ですが、それはいまの状態が保てればいいなと考えています。それより店舗をもってスタッフがお客さんとかかわる機会をもっと増やしていきたいと思います。もう1つ、これまで毛糸がほとんどでしたが、もう少しニット商品レンジを強化したいなと考えています。

**小林** 新しいアイデアもいっぱい生まれてきそうな予感がします。好きなことを通して社会に貢献するって素晴らしいですね。今後のご活躍を期待しています。お体を大切になさって、特に肩こりなどはありませんか。

**M・梅村** 編み物をしていると、日本では「肩が凝りませんか」とよく聞かれます。ですがドイツは日本人と違う編み方なのです。逆にドイツでは肩が凝っていたら「編み物をしなさい」と言われるのです。

**小林** そうなんですか。いま気がついたのですが、確かに肩が動かないで指だけ動いています。日本と編み方が違いますね。私もパソコンでよく肩が凝るので、先ほどの集中力強化と併せて、ドイツ式編み物を見直す必要がありそうです。きょうはありがとうございました。